

非意図性を表す副詞の一考察

－ 「ふと」と「思わず」をめぐって－

金 承 偶 *

(e-mail : selenemk214@hanmail.net / selene22@live.co.kr)

目 次

1. はじめに	3.2 動作主の意志性の有無による現象
2. 先行研究の検討	3.3 動詞との相関性及び意味的現象
3. 「ふと」と「思わず」の意味・統語的分析	3.3.1 「ふと」の動詞分類
3.1 文における統語的現象	3.3.2 「思わず」の動詞分類
3.1.1 単文における特徴	4. おわりに
3.1.2 複文における特徴	

1. はじめに

「主体の意図に関わる副詞」¹⁾のうち、非意図的であることを表す副詞「ふと（ふつと）²⁾」と「思わず」は、次の例に見られるように、共に「動作主がある行為をそしようという意図をもって行っているのではなく、ある外部の要因により、その行為が瞬間的、反射的

* 韓国外国語大学 講師 日本語学

1) 主体の意図に関わる副詞は、中右(1980)では「様態の主語副詞」、仁田(1983)では「主体めあて副詞」、森本(1994)では「文の主語の主観的・心理的態度を表す副詞」として命名し、「様態の副詞」と区別している。

2) 「ふつと」の意味について日本国語大辞典(1972:941)では、次のように記されている。

ふつと《副》(一) ①省略 ②前後の脈絡もなく、突然に行動したり、事態が変化したりするさまを表わす語。

(二) 口をすぼめて息を吹いたり、吹き出して笑ったりするさまを表わす語

上のうち(二)の意味は、飛田・浅田(2002:492)では擬声・擬態の用法として扱っている。そのため、「ため息をつく」と「息を吐く」と共起した「ふつと」は今回の考察対象から除外した。また、(一)のうち②に該当する「ふつと」は収集した用例から45例が確認された。以下、本文の記述には代表として「ふと」を用いることにする。

に発生する」という共通点が見られる。(次例(1)(2)の彼・真以子は動作主を指し、点線部分は外部の要因を示す。)

(1) 絃子が立っている野外ステージのまえを、ひとりの人影が通りかかった。

白いシャツを着て、肩からは大きな画材道具を下げている。

その人は、リンゴを取ってくれた、あの人だった。彼は、ステージの上で、

一生懸命演技をしている絃子を見て、ふと足をとめた。 <愛:9>

(2) 引越しを終えたその夜、さすがに疲れて夕食を作る気になれず、

真以子はコンビニで弁当を買ってきた。

マンションに隣接している駐車場を抜けようとしたその時、小さく猫の鳴く声がし、

思わず足を止めた。 <今夜:340>

本稿では、このように「ふと」と「思わず」を類義関係にあると考え、両副詞を対象とし³⁾、その類似点と相違点について分析を行う。その際、両副詞を対比させ、共起する動詞を含めた構文的特徴に注目し、両副詞の意味・統語的な特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究の検討

ここでは、「ふと」と「思わず」の主な先行研究を検討し、問題点と本稿の立場を定める。「ふと」に関する研究には川井(1996a,b)があり、「思わず」に関する研究には森田(1989)、浅野(1982)、川井(1996b)、酒井(1998)などがあげられる。また、「ふと」と「思わず」を比較考察している研究に小矢野(1982)、李澤熊(2000)などがある。日本国語大辞典(1972)では「ふと」と「思わず」の意味を次のように記述している。

「ふと」(不図): 1. 行為・状態の変化などが急で突然であるさま。

2. 偶然になされるさま。ちょっとしたきっかけや思いつきで行うさま。

「思わず」(不思): 1. 思いがけず、意外にも

2. 考える間もなくとっさに。無意識に

まず、「ふと」を対象としている川井(1996a,b)の研究を見てみよう。川井(1996a,b)では、意味と談話機能に注目し、「ふと」を「ある行為の波及性認識の欠如を表し、重要

3)本研究は「主体の意図に関わる副詞」全般に関する研究を行うための一分野として、用法上類似性が見られる「ふと」と「思わず」を研究対象にしている。

川井(1996a,b)はこのような構文的環境を考慮せず、動詞「感じる」を感情動詞に一括して四類に入れている。これは、意味的にみると、四類の〈連想〉とは捉えにくく、むしろ一類の〈気づき〉に近いと言える。したがって、正確な分析のためには実例に基づいて構文的特徴や動詞との相関性などを考察する必要がある。なお、二類の「ふとした+名詞」の用法について「ふと」の用法として一緒に扱ってよいかどうかはなお検討の余地があると考えられる⁷⁾。

次に、「思わず」の研究を見てみよう。森田(1989:289)では、「思わず」について「反射的で一回限りの個別的な行為に用いる」とし、浅野(1982:201)では、「〈刺激〉が原因となって」「その〈刺激〉に〈予想外〉の行動が直接結び付いている」ことが指摘されている。酒井(1998)など他の研究にもほとんど同様な指摘が見られ、本稿も同じ立場である。

最後に、「ふと」と「思わず」を対比した研究を取り上げる。小矢野(1982)は「ふと」と「思わず」は事態の発生が突然で、一時的である様子を表す点では共通するが、「ふと」は「思わず」のように「その事態が何らかの刺激によって引き起こされたことを示す(下線部が刺激を表す)こともあるけれども、さほど有意味な特徴ではない(p.59,例(36)より)」と述べ、例(7)を上げている。

(7) 木村を見つけると、綾子はふと心が明るんで、しろから肩を叩いた。<小矢野(1982:59)>

一方、李(2000)は「思わず」について「〈話し手が〉〈ある刺激が原因となって〉〈(予想外の)瞬間的・条件反射的行動をとる様子を表す〉(p.231)」と記述し、「ふと」の場合は、話し手の行為である場合と話し手の関わらない客観的な事柄に用いられる場合とがあり、いずれも「「ある事柄が明確な理由・原因なしに瞬間的に発生する」という類似性がある(p.228)」と記述している。また、次の例(8)をあげて「ふと」を「思わず」に言い換えられることを主張し、「ふと」を用いた場合は「なぜかはっきりわからないが、突然立ちどまった」というようにとらえられるのに対して「思わず」を用いた場合は「(目の前に虎が現れたなどの)ある刺激によって瞬間的・条件反射的に立ちどまった」ととらえることができる(p.228-229)」と述べている。

(8) 根気よく、歩きまわるしかなかった。ふと (思わず) 立ちどまった。<李(2000:228)>

上の小矢野(1982)と李(2000)の説明を踏まえると、「思わず」には〈事柄の成立に明確な要因が存在する〉が、「ふと」には〈事柄の成立に明確な要因が存在しない〉とい

7) この「ふとした+名詞」の用法については今回の考察対象から除外し、今後の課題にする。

うことになる。しかし、小矢野(1982)で提示した例(7)からは「ふと心が明るくなったのは、木村を見つけたからだ」という要因が本稿で提示した例(1)の如く明確に読み取れる。その事実を本人も認めながらなぜさほどの有意味ではないとしているのか、という疑問が生じる。また、例(8)を上げて「ふと」を「思わず」で言い換えられるという李(2000)の主張も矛盾していると思われる。なぜなら「ふと」と「思わず」が交換できるためには「ふと」にも事柄の成立に明確な要因が存在しなければならないからである。また、本稿で用いる「動作主」に該当するものを李(2000)では「話し手」を使っているが、地の文の場合は話し手と動作主とが一致しない場合が多く見られるので一律的な基準を提供していないと思われる。

以上、先行研究について検討した。本稿ではこれらの先行研究に負うところも少なくないが、いずれの研究も意味に重点が置かれていて、構文的特徴など用法の制約が明確に把握できない場合が多く見られる。したがって、以上のような検討を踏まえ、客観的な根拠に基づいた考察を行うために、1950年代以降の作品から用例を収集し、「ふと」と「思わず」が使われている文章の構文的な特徴を視野に入れて、両副詞の類似点と相違点について意味・統語的な分析を行う。分析に先立ち、「ふと」と「思わず」に関する本稿の見解を次のように想定する。

- ① 「ふと」には、(a)事態の成立に明確な要因が存在せず、その事態が瞬間的、偶発的に発生する場合と、(b)ある刺激を受けて瞬間的、反射的に事態が成立する場合とがある。
- ② 「思わず」には、事態の成立に明確な要因が常に存在し、それがモチーフになって瞬間的、反射的に事態が成立する。
- ③ 「ふと」と「思わず」は<瞬間性>と<非意図性>という共通の意味素性を持ちながら、<偶発的>か<条件反射的>かで区別され、事態を引き起こす明確な要因がある場合は置き換えることができる。

以下では、以上で述べたことを踏まえ、本稿の3つの見解に照らし合わせて「ふと」と「思わず」の分析を行う。まず、3.1では、統語的現象を把握するために文の中でどのように現れるかを概観し、3.2では、意志性の有無の観点から動作主の性質を検討する。さらに、3.3では、副詞と動詞との相関関係を概観し、それをベースに動詞を下位分類し「ふと」と「思わず」の意味的特徴を明らかに提示する。

3. 「ふと」と「思わず」の意味・統語的分析

3.1 文における統語的現象

ここでは、「ふと」と「思わず」が文の中でどのように現れるのかについて見てみる。まず、3.1.1では、基本的な文タイプについて両副詞が文においてどのように現れるかを見てい

き、3.1.2では、複文において両副詞にどのような相違が現れるかを見ていくことにする。

3.1.1 単文における特徴

文を話す目的によって、平叙文、疑問文、命令文という三つに分ける場合⁸⁾、「ふと」と「思わず」は共に平叙文にのみ現れるという共通点が見られた。このような特徴は、両者ともに「非意図性」という意味素性をもつことで、働き掛け性を持たず、人間の意志でコントロールできない動作や現象について述べるからであろう。

平叙文の基本類型は、現実世界の事態を経験や知識によって直接的に認識するか、想像や思考によって間接的に認識するかによって、前者は断定形「 \emptyset 」によって表わされ、後者は「だろう」によって表わされる(日本語記述文法研究会(2003:143))。「ふと」と「思わず」が現れる平叙文の類型を観察してみると、次の例に示したように「だろう」文には見当たらず、断定文に現れるという特徴が見られる。

- (9) ふと、通りの向こうを走っていく女の子の揺れる髪が 目に止まった。〈愛:310〉
 (10) ふと電話が 目に入る。〈愛:207〉
 (11) 思わず小さく 叫び声を上げた。〈今夜:301〉
 (12) 「えっ」 思わず 声をあげる。〈マドンナ:148〉

例(9)から(12)は、いずれも直接的に認識している事柄について述べられている。したがって、間接的に認識していることを表す「だろう」文に現れないのは当然であろう。また、これらの例は、文末形式が「する」形式であれ「した」形式であれ、意味的にはほとんど違いが見られなく⁹⁾、その動作を一まとまりとして捉えているので、進行している事柄を表し得ないのが特徴的である。これは、「ふと」と「思わず」の共通側面である「瞬間性」によるものと考えられる。

以上は、「ふと」と「思わず」の文での共通側面を検討した。両副詞は、平叙文のみ現れ、現実世界の事態を直接的に認識する断定文に現れるという共通の構文的特徴を持ち、それに「非意図性」と「瞬間性」の意味素性が関与していることを確認した。

3.1.2 複文における特徴

前述したように、「ふと」と「思わず」は、「非意図性」と「瞬間性」という共通の意

8)鈴木(1972:43-60)では、文タイプを、はなす目的によって「つたえる文」「たずねる文」「はたらきかける文」という3つに分けている。これらは、それぞれ伝統的な用語では、「平叙文」「疑問文」「命令文」に相当するものである。本稿では、伝統的な用語に従い、「平叙文」「疑問文」「命令文」とよぶことにする。

9)工藤(1995:166)は、小説の地の文には、人間の基本的な言語活動である日常会話とは異なる、時間構造と人称構造とがあることを指摘している。地の文では「した」形式が基本であるが、作中人物の上に視点をおいて知覚体験性を明示するためにしばしば「する」形式が用いられる。

味素性を持ちながら、＜偶発的＞か＜条件反射的＞かで区別されると指摘した。このことを裏付ける根拠を複文に現れる相違点から見いだすことができる。

まず、「ふと」の場合は「発見」を導く「と」の条件文に頻繁に現れるという特徴が見られる。先行研究のところでも指摘したように「たら」にも現れるが「と」(25%)に比べて「たら」(1.5%)はあまり見当たらない。これは、「ふと」がほとんど地の文に現れるという特徴に起因するものだと考えられる。次の例を見てみよう。

- (13) ふと気がつくと、なんだかフラフラとあっちへ行ったりこっちへ来たりする、
へんな男が紛れ込んでいる。 <もものかんづめ:190>
- (14) 美咲はすすすこと公園の脇を通りかかると、何か焼いているのか煙が立ちのぼっている。
ふと見ると、なにやらバタバタとあわただしい様子の康の背中が見えた。
 <LOVE:115>
- (15) 飛ばしたフリスビーを拾いにいって、ふと顔をあげると、
 向こうの方に晃次が立っているのに気がついた。 <愛:61>

例(13)から(15)は、それぞれ「ふと」の現れる条件節が、後件の「へんな男が紛れ込んでいる」「康の背中が見えた」「晃次が立っているのに気づいた」のような発見される事態の契機になる行為を表し、動作主の「気づく」「見る」「顔をあげる」という行為には明確な要因が存在せず、偶発的で瞬間的に発生したことが確認できる。この場合、動作主の行為と後件に発見される事態には時間的な幅がほとんど見られなく、条件節の動作主が認識主体として作用することが分かる。これに関連して、川井(1996)は「と」の条件文にのみ「ふと」が生起すると指摘したが、次の例(16)のように「ふと」が条件文のみならず「とき」節¹⁰⁾でも発見の事態を導くという事実を確認することができる。

- (16) 並んでる本を見て歩くうち、まだ読んでいない新刊の少年マンガが目に入った。
ふと手に取った時、向こう側のコーナーに夏目がいるのを見つけた。 <恋:91>

例(16)の「とき」節は「手に取った」という行為の要因が明確でなく、その行為が偶発的で瞬間的に発生し、その瞬間的行為によって「夏目がいるのを見つけた」の如く、新たな事態を発見する契機として作用する。これは、川井(1996)の「ふと」が偶発条件の「と」のみを許容するという主張の過ちを証明していると思われる。

次に「思わず」の場合を見てみよう。前述したように、「思わず」は事態の成立に明確な要因が常に存在するため、因果関係を表す「ので」文の主節に頻繁に現れるという特

10) 寺村(1983)は、PtキQの場合、「話し手がまずPという事態を述べ、次にそれに続いて起ったことを、いわば発見として述べる場合にはこの形が最も適当である(p.263)」と述べている。

徴が見られる。その場合、基本的な「ので」文とは、前件が後件に表される事態のきっかけになることは同様であるが、後件の事態の成り立ちには次のような違いが見られる。

- (17) 昨日は仕事が休みだったので、映画を見に行きました。〈庵(2000:212)は筆者〉
 (18) 「……あの、寝てるんだと思います。徹夜で描かれたみたいだから」
 「あなた、なんでそんなこと知ってるのよ」薫が言った。
意外に強い口調だったので、紘子は思わずうつむいてしまった。〈愛:80〉
 (19) 男は電話ボックスによく貼ってあるようなエスコートクラブの小さなチラシを見て、
 感心している——かと油断していると、近づいて体に触れようとするので、
アキは思わず立ち上がって後ずさった。〈恋:34〉

例(17)では前件の「仕事が休みだった」という事実が、後件の「映画を見に行った」という事態のきっかけを表し、後件の行為が自らの意志で行われていることが確認できる。ところが、例(18)(19)のように「思わず」が加わる場合、「ので」文の「意外に強い口調で言った」「変な男が体に触れようとする」という事態がそれぞれ後件の事態を引き起こすモチーフになって瞬間的、反射的に「うつむいてしまう」「立ち上がる」ように作用し、この場合、例(17)とは違って、後件の事態の成り立ちには動作主の意志が関与していないことが分かる。このように、「思わず」に事態の発生の要因が常に存在するという事実は、次の例(20)(21)の因果関係を表す「て」と「に」の文でも確認できる。

- (20) 健二を怒鳴った勢いで、早足で校門から出てきた美紗子は、そこでアキが
 ウロウロしているのに気づいた。目があってしまい、さらに不愉快な気分になる
 「あ、昨日はどうも……」アキも気づいて、思わず頭をさげた。〈恋:145〉
 (21) 「杉崎さん」
 「……何でしょう」真剣な南の声に、杉崎は思わず姿勢を正した。〈ロング:400〉

以上は、「思わず」に事態の成立に明確な要因が存在するため、因果関係を表す「ので、て、に」の複文に現れることを確認した。ところが、「ふと」にも「て」と「に」の文に現れる場合が見られる。次例(22)(23)のように、何かのきっかけ・刺激によって引き起こされる場合は「思わず」に近くなり、共通側面として置き換えることが可能になる。

- (22) 線香花火にほのかに照らされた真琴の顔が、
 苦しくなるくらい鮮明に晃次の胸によみがえってきた。
 少女のような真琴の笑顔が晃次の視線にきづいて、ふと止まる。〈元カレ:65〉
 (23) マンションの近くまで来ると、ピアノの音が聞こえてきた。

やさしく、心が洗われるようなそのメロディに、疲れた南の顔がふとなごんだ。〈ロング:76〉

(22)は「晃次の視線に気づいて」の要因によって動作主の「表情が止まる」ということが起こり、(23)は「やさしく、心が洗われるようなメロディが聞こえてきた」の要因によって動作主の「顔が和んだ」の如く、何らかのきっかけ・刺激によって事態が引き起こされたことが確認できる。これは、本稿で提示した「ふと」の意味((b))に該当するもので、「ふと」にも「(b)ある刺激を受けて瞬間的、反射的に事態が成立する」場合があることを裏付けている。このように明確な要因が存在する場合は「思わず」に置き換えられると思われる。

以上、複文での両副詞の現象を検討してみた。「ふと」の場合は、本稿で主張した「(a)事態の成立に明確な要因が存在せず、その事態が瞬間的、偶発的に発生する」場合と「(b)ある刺激を受けて瞬間的、反射的に事態が成立する」場合とがあることを確認した。(a)の場合は「と」の条件節と「とき」の節に現れ、「発見的事態を導く」という役割をし、(b)の場合は、因果関係を表す「て」と「に」の文に生起し、「思わず」と共通側面を持つようになることを確認した。また、「思わず」の場合は、事態の成立に明確な要因が存在するため、因果関係を表す「ので」「て」「に」のような複文に現れることを確認した。

3. 2 動作主の意志性の有無による現象

ここでは、副詞が限定する動作主の性質について見てみよう。意志性の有無の観点から動作を行う主体は、有情物であるか、非情物であるかで二つに分けられる¹¹⁾。この観点から検討した結果、「ふと」と「思わず」が限定する動作主の性質に相違点が見られた。「思わず」の場合は、人間に関する事態のみ関わるので、動作主に成りうるのは有情物、つまり人間に限るという制限が見られる。これに対して「ふと」の場合は、動作主に成りうるのは、有情物であれ、非情物であれ、制限なく用いられるという特徴が見られる。以下では「ふと」の例をあげて見てみよう。

(24) マンションの前まで帰って来た真二は、ふと顔をあげた。
せつないピアノの調べに耳を済ます。〈ロング:373〉

例(24)の場合は、動作主が有情物、つまり人間の行為であり、「顔をあげる」という動作は「真二」の動作であることが示されている。この場合、「ふと」が限定するのは文の主語である動作主の行為であり、その行為が瞬間的、偶発的に発生することに焦点が当てられている。ところが、「ふと」が限定する動作主が非情物である場合はどうか。次の例から確認してみよう。

11) 宮島(1972:422)では、有情物というのは、ほとんどは人間であるが、動物も、感情や理性をもったものとして扱う場合には有情物に含まれるとし、非情物のグループにはいるのは、植物、鉱物、抽象名詞で表される動作 性質 関係などであると述べている。

- (25) 祐司はその間を器用に通り抜け、入り口に近い白線の中に駐車した。
その時ふと、麻由子の目の端を一台の車がかすめた。〈さよならをするために:22〉
- (26) 美紗子はキャッチボールの様子を眺めようと、近くのベンチに腰かけた。
夏目の参考書やノートが置きっぱなしになっている。
美紗子はやれやれ、と散らかった参考書を持ち上げると、
ふと一枚のメモが落ちてきた。〈恋:118〉
- (27) 私が偶然その樹の前に立って、
再びこの宅の玄関を跨ぐべき次の秋に思を馳せた時、
今まで格子の間から射していた玄関の灯がふっと消えた。〈ころ:91〉

例(25)から(27)の「掠めた」「落ちてきた」「消えた」の動作主は、それぞれ「車」「メモ」「灯」であり、この非情物の動作を「ふと」が限定している。この場合、文には認識主体に該当する文の主語が明示された事態と「ふと」の限定する事態が同時的に共存し、認識主体が偶発的に発生する「ふと」の限定する事態を瞬間的に認識するというように焦点が当てられる。ここで注目すべき特徴は、このような現象のほとんどが「と」と「とき」の構造に生起し、動作主が有情物の場合と違って、「と」と「とき」節には<認識主体>が現れ、主節には「ふと」の限定する事態が現れるということである。これに関連して李(2000)では「ふと」は「話し手の関わらない客観的な事柄に」用いられ、<話し手が><(前触れなしに)突然生じるある事柄に関して><その発生の原因が明確ではないととらえる様子を表す>(p.228)と述べている。しかし、李(2000)の説明は「ふと」の事態を主観的か客観的かでとらえていることになり、上のような動作主の意志性の有無や発見的事態を導く構造に生起するという構文的側面が明確に把握できないと思われる。従って、主観とか客観とかの紛らわしい捉え方よりは、むしろ動作主の性質によるものと捉えた方がより適切ではないかと思われる。

以上、動作主を意志性の観点から検討してみた。その結果、「思わず」の場合は動作主が有情物(人間)のみであるのに対し、「ふと」の場合は、動作主が有情物である場合と非情物である場合とがあり、「ふと」が限定する動作主が非情物の場合には、発見の構造に縛られ、文の主語にくる主体が認識主体として「ふと」が限定する事態を認識するということが分かった。以下では、動詞との相関関係を検討し、両副詞の性質をもう少し深く調べてみる。

3. 3 動詞との相関関係及び意味的現象

ここでは、副詞と動詞との相関関係を概観し、それをベースに3.3.1では「ふと」の動詞分類を、3.3.2では「思わず」の動詞分類をし、両副詞の意味特徴を明らかにしてみる。

小矢野(1982:50)によれば、同一の副詞が修飾し得る動詞についてその意味の共通性

を求める上では、動詞の語彙的意味を中心に考える視点ではなく、副詞の語彙的意味を中心に考えなければならない。拙稿(2007)でも検討した副詞「わざと」の場合においても、その語彙的な意味に内在されている<意図性>のため、「わざと」が現れる文章の述語は「気づく」や「見える」などのような無意志動詞は現れない特徴が見られた。これに対して、「ふと」と「思わず」の場合は、どうであろうか。結論からいえば「ふと」と「思わず」の場合は<非意図性>がその語彙的意味に内在しているにも関わらず、意志動詞とも非意志動詞とも共起するという特徴が見られた。ところが、両者共に意志動詞と共起する場合、その動詞の持つ意志性にも関わらず、動詞の語彙的な意味が副詞の意味に影響を受け、その動詞の意志性が具体化されない特徴が見られる。こういうことから考えてみると、副詞が使われる文の述語はその副詞の語彙的な意味に左右されていることが分かる。

本稿は、このことを踏まえ、動詞を<意志動詞>と<無意志動詞>に分けて12)、動詞との共起関係における両副詞の異同を見てみたい。次の<表1>は、1950年以降の作品から収集した用例の分布である。

<表1> 「ふと」と「思わず」の用例分布

副詞の種類 \ 意志性	意志動詞	無意志動詞
「ふと」 344例	132 (38.4%)	212 (61.6%)
「思わず」 694例	465 (67%)	229 (33%)

<表1>は、同資料を対象として得られたデータであり、そこからは、「ふと」(344例)に比べて「思わず」(694例)の出現頻度が高いことが確認できる。また、「ふと」の場合は、無意志動詞(61.4%)との共起が多く、「思わず」の場合は、意志動詞(67%)との共起が多いことが特徴的である。

3.3.1 「ふと」の動詞分類

次の<表2>は、収集した「ふと」の総計344例をもとに共起している動詞を下位分類した結果である13)。

12) 動詞を「意志動詞」と「無意志動詞」に分ける場合、明確に二分類するのは難しいと思われる。たとえば、動詞「笑う」は無意志のように思われる動詞であるが、「笑おう」「笑わない」などの形で用いられる場合、意志性が感じられる。また、前後の文脈や副詞、文法形式などによっても意志・無意志の両方が可能な場合が多く見られる。本稿では、意志動詞と無意志動詞の分類を鈴木(1972: 318)『日本語文法 形態論』の定義に従い、さそいかける形と命令する形を本来の意味で用いることができるかどうかで分類した。無意志動詞の基準は、
 ①自然現象など非情物の動き②人の生理現象や心理現象を表すもの③受身的な意味を持つもの、可能動詞④偶然という意味を内在するもの」に基づく。

＜表2＞「ふと」総計344例

意志性	意味内容		単語レベル	句レベル
意志 132(38.4%)	視覚活動 ¹⁴⁾	49(37.1%)	見る、振り向く、眺める、振り返る、見渡す、見上げる	眼をやる
	行動動作	37(28%)	取る、渡る、見せる、当ててみる、聞いてみる	手をとめる、足をとめる、動きをとめる、手をあげる、顔をあげる、頭をあげる、身をよせる、口をよせる
	思考活動	22(16.7%)	思う、考える	
	言語活動	13(9.9%)	言う、呟く、黙る	
	生理活動	11(8.3%)	笑う、微笑む	
無意志 212(61.6%)	知覚活動	72(34%)	気づく、感じる、見える、聞こえる	気がする、目に入る、目に止まる
	思考活動	63(29.7%)	思い出す、思いつく	頭に浮かぶ、思いをいだく
	感情変化	51(24.1%)	和む	気になる、不安になる、不安を覚える、気が変わる、気が向く、表情に浮かぶ、表情になる
	その他	26(12.2%)	死ぬ、生きる	会話が途切れる、声が途切れる、車が掠める、目が合う、目が出合う

この＜表2＞からもっとも注目すべき特徴は、前述したように、無意志動詞との共起が多かったことと、認識活動¹⁵⁾を示す動詞が多く見られたことである。特に、知覚動詞(気づく・感じる)、視覚動詞(見る)、思考動詞(思う・思い出す)のような動詞が主類で、意志動詞71例(20.6%)と無意志動詞135例(39.3%)を合わせて、全体で206例(59.9%)を占めている。このように、認識活動を示す動詞との共起が多いことは、前述で発見を導く「と」と「とき」の文でも確認できたように、「ふと」が認識活動と深く関わっていることを物語っているし、これが「ふと」のもっとも基本的な本質であることを裏付けていると思われる。認識活動を示す動詞類は、認識の仕方によって、いくつかに分けられるが、「ふと」の場合は、主に視・知覚で認識する場合と思考活動で認識する場合に現れる。視・知覚で認識する場合、無意志動詞では知覚活動を示す動詞「気づく、感じる」が、意志動詞では視覚

13)この＜表1＞には出現頻度の高い動詞が上げられている。また、動詞のパターンに「目に入る、気が変わる、目に止まる、目が合う、表情に浮かぶ、言葉がこぼれる」のような組み合わせ動詞が多く見られたことから、動詞の分類基準を単語レベルのみならず句レベルまで広げて分類した。

14)「振り返る、振り向く」のような複合動詞は、語彙的な意味からみると、動作性よりは視覚活動の意味を強くおびていると思われ、「見る、眺める」のような動詞と同列に視覚活動を示す動詞グループに含めて分類した。

15) 認識活動は見たり、聞いたり、考えたりする活動である。奥田(1983: p.43～63)は、心理的なかわりを表す連語のうち、認識の結び付きを表すものには、①感性的なむすびつき(視覚などの感覚動詞) ②知的なむすびつき(思考動詞、理解を示すグループ)③発見的なむすびつきがあると指摘している。

活動を示す動詞「見る」が代表的であり、＜瞬間性＞と＜偶発性＞の意味素性が関与する。動詞「見る」は「目で物事を捉える」ということが意味の中核であるが、視覚で対象をとらえる活動は発見である場合もあるし、発見でない場合もある(奥田(1984:4))。動詞「見る」が「ふと」と共起する場合は「眺める」という意味を表すのではなく、次の例(29)のように「発見する」という意味を実現するようになる。

(28) 目を冷まそうと顔を洗っていると、ふとそこに落ちている紙切れに気づいた。

＜恋:38＞

(29) 手持ち無沙汰で、ふと外を見た。すると、ガラスに張られた賃貸情報を、南が一生懸命見ているのに気がついた。 ＜ロング:276＞

同じく認識活動を示す「思考動詞」の場合、無意志動詞「思いつく」「思い出す」との共起が約3割を占める。意志動詞「思う」と「考える」も22例(16.7%)確認されたが、「ふと」と共起する場合は、引用句によって想像内容が具体的に差し出され、(30)(31)のように「思いつく」「思い出す」ような意味を実現するようになる¹⁶⁾。そして「想像する」「思いつく」ことが、瞬間的、偶発的に発生することが確認できる。この思考動詞は「思わず」には見当たらない現象である。これはおそらく「ふと」のように認識活動とは無関係であることと、「思わず」が示す「不思」の意味によるものと考えられる。

(30) 美咲は四人がけのシートに座りながら、ふと思いついて
鞆から池谷にもらったガラスのイルカをとり出した。＜LOVE:292＞

(31) 椅子の背にかけてあったトレンチコートを取り上げ、
ふと佐代子はききそびれていた質問を思い出した。＜やさしい関係:196＞

(32) 「よくお考えになって……」証券レディの口紅のはげかけた唇がしゃべっていた。
この人だって辛いのかもしれないと、ふと思った。＜女たちのジハード:82＞

(33) 「おれもひとつ外に出て、雨にでも打たれてくるか……………」
矢来はふとそんな事を考えた。＜男だけの世界:48＞

次に、「顔をあげる」と「手をとめる」のような行動動作を示す動詞の場合は、37例(28%)確認できた。この行動動作を示す動詞は、例(34)(35)のように「と」や「とき」の文に現れる場合は、構文的影響を受けて動作性が具体化されず、「発見的事態を導く」という意味を実現するようになるが、(36)から(38)のように事態を引き起こす要因が明確

16)宮島(1972:221)では、(14)の「考える」は経過を表し、「思いつく」は結果を表すとしている。そして「考える」に「突然」とか「ふと」などの修飾語がつくと、途中の経過は問題にされず、一定の結論を出す「考え出す」や「考え付く」など同様のことを表すと指摘している。

に読み取れる場合は、「思わず」に置き換えられる。

- (34) うつむいたまま歩を進め、ふと顔をあげたとき、アスファルトの起伏した道の向こうから、人がやってくるのが見えた。〈女たちのジハード:405〉
- (35) ふと、手をとめた。今年の春、ふたりで行った八ヶ岳の写真だった。
〈燃えつきるまで:151〉
- (36) 「今日の君は、いつにも増して、ツケツケしている」美咲はふと手をとめた。
「ツケツケ……?何語ですか?それ?」 〈LOVE:128〉
- (37) 「相手はどんな人よ、見せて」比呂子がふと手を伸ばした。〈あなたに電話:24〉
- (38) 「本はどうやったら出版できるんですか」工藤はふっと顔をむけた。〈誤算:191〉

また、「ふと」と共起した感情動詞の場合は、51例(24.1%)確認され、感情の変化を表している。この場合、例(39)(40)のように感情の変化が明確な要因なしに瞬間的に発生する場合もあるし、例(41)(42)のように感情の変化を引き起こす明確な要因が明示される場合もある。後者の場合は前述したように「て」と「に」の文が感情の変化を引き起こす要因を表す。特に、感情を表す動詞の場合は、例(42)のように「に」が感情の生じる起因を表す(日本語記述文法研究会(2009:81))ことが多い。

- (39) 矢来は、ふと気が変わってそこでエレベーターを降りた。〈男だけの世界:53〉
- (40) 東次は部屋に留まってくれたが、菜央は疲れきってウトウトしてしまった。
「東次……」夜半、ふと不安を覚えて目を覚めた。〈元カレ:309〉
- (41) (相手を見つけて) 紘子は台車にジュースを積んで売店に運ぶ途中だった。
晃次のはりつめていた気持ちが、ふっと和んだ。〈愛:57〉
- (42) マンションの近くまで来ると、ピアノの音が聞こえてきた。
やさしく、心が洗われるようなそのメロディに、疲れた南の顔がふとなごんだ。〈ロング:76〉

以上は、「ふと」と動詞との共起関係を見てみた。「ふと」が意志動詞と共起する場合、副詞の意味に影響を受け、その動詞の意志性が具体化されないことが確認できた。

ところが、「ふと」にも、例(43)の「わざと」のように〈意図性〉が読みとれる場合が見られる。例(44)は意志動詞が「ふと」に影響されず、意志性を保っていることが分かる。これは、「～てみる」構文の特徴上、「聞く」が持っている意志性と「～てみる」の意図性が結合することによって、「ふと」という副詞が力を発揮することが出来ず、「ふと」の意味素性のうち、〈瞬間性〉だけが残るようになる。これは「～てみる」に起因するものであると思われる。

- (43) 萌は男の左手薬指に目をやった。まだ新しいプラチナのマリッジリングが光っている。
あのり子に落ちなかった、というだけで、萌はいくらか関心を持った。
それで、わざと聞いてみた。「り子とは、どちらで？」〈肩ごしの恋人:12〉
- (44) 山口が机で伸びをする。知美がちらりと視線を向ける。何か合図を受け取った
のではないか。春彦は仕事が手につかないのである。そんなとき、たまたま
課で真里と二人きりになった。暇そうにしていたのでお茶に誘った。
世間話をしていたふと知美のことを聞いてみた。〈マドンナ:49〉

3.3.2 「思わず」の動詞分類

次の〈表3〉は収集した「思わず」の総計694例をもとに共起している動詞を下位分類した結果である。

〈表3〉「思わず」総計694例

意志性	意味内容		単語レベル	句レベル
意志 465(67%)	言語活動	175(37.6%)	言う、叫ぶ、叫く、話しかける、訪ねる、質問する、聞き返す、呼ぶ、呼び止める、答える、怒鳴る、	声を出す、声をあげる、話をそらす、
	行動動作	161(34.7%)	握る、掴む、乗る、取る、閉める、追い掛ける、叩く、上がり込む、立ち上がる、立ち止まる	足をとめる、顔をむける、顔を覆う、顔を隠す、しきさをすく、手を引っ込める、身を乗り出す、姿勢を正す
	視覚活動	68(14.6%)	見る、見合わせる、振り返る	目をそらす、目をくぼる、目をみはる、視線を伏す、下をむく
	生理活動	61(13.1%)	笑う、苦笑いする、微笑む、泣く	
	思考活動			
無意志 229(33%)	感情変化	113(49.3%)	たじろぐ、かっとなる、ぞっとする、どきっとする	はずかしくなる、なきそうになる、笑顔になる、頬がゆるむ
	言語活動	57(24.9%)	漏れる	言葉がこぼれる、口に出る、声がふずむ、口調がきつくなる
	生理活動	49(21.4%)	むせる	ため息がもれる、唾をのみこむ、吐気がする、息をはく、あくびをする、息をのむ
	知覚動詞	10(4.4%)	感じる、気づく	

この〈表3〉の際立った特徴は、総694例のうち、意志動詞が465例(67%)を占めていることである。このように「ふと」に比べて「思わず」が意志動詞との共起が多いことは、動作を引き起こす明確な要因が常に存在するため、因果関係を表す構文の特徴上、意

志動詞との共起を要求するからであろう。また、意志動詞の場合は、補助動詞「～てしまう」がついて無意志化される傾向が多く見られる。さらに「思わず」と共起する動詞パターンをみると、言語活動を示す動詞175例(37.6%)と行動動作を示す動詞161例(34.7%)の分布が多く目立つ。このような動詞パターンは副詞「わざと」と似ている側面である。次の例を見てみよう。

- (45) 私は照れ隠しに、わざと拗ねたように言った。〈同窓会:247〉
 (46) 父の怒りを少しでもやわらげたいと思ひ、わざと生意気な口をきいた。〈誤算:60〉
 (47) 「あの子いったい、何考えてんのよ！」やりきれなくて、思わず大声を出す。〈恋:58〉
 (48) 「正ちゃん、やめてよ！私、別に夏目と結婚したいなんて言ってないじゃん。
 やめてよ。もうやめてよ」アキは悲しくて、情けなくて、
 思わず涙まじりの声になってしまった。〈恋:135〉

例(45)(46)の「わざと」の場合は、「照れていることを隠す」「怒りをやわらげたい」という意図をもって行動を行っているのに対して、例(47)(48)の「思わず」の場合は、それぞれ「相手の発言に腹が立って」反射的に大声を出している。このように「思わず」が意志動詞と共起する場合、その動詞の意志性が具体化されず、「思わず」の影響をうけて無意志化されることが確認できる。

一方、無意志動詞の場合、感情動詞が113例(49.3%)を占めている。また、生理動詞も意志動詞で61例(13.1%)、無意志動詞で49例(21.4%)の分布を占めている。「思わず」はいずれの場合も、常に事態を引き起こす外部の要因が存在するため、それがモチーフになって感情の高まりや感動あるいは生理的興奮、恐怖感などが引き起こされるときに用いられることが確認できる。

- (49) 美咲はそんな昭二の言い方が、ありがたくて、懐かしくて、いろんな思いや
 悲しみが一気にあふれてきて、思わず泣きそうになった。〈LOVE:401〉
 (50) 「何とかどころか、すごく幸せって顔に書いてあるわ」流実子が
からかい気味に言ったので、優里は思わずほほ笑んだ。〈誤算:194〉
 (51) 「君たちなら何を着ていてもすぐ刑事と分かるさ。そのままがいい。
 まさかウェイトレスの格好をする訳にもいくまい」
 「私は小学校の学芸会で女の子役をりましたが」巻川刑事が
真面目な顔で言ったので、一同が思わず吹き出した。〈マリオネットの罠:271〉

4. おわりに

以上、「ふと」と「思わず」を対象とし、両副詞について、共起する動詞を含めた構文の特徴に注目し、意味・統語的観点から考察を試みた。その結果は次のようである。

(1) 3.1 文における統語的現象——単文と複文

・単文では、両副詞ともに直接認識した事態について述べられる平叙文の断定文に現れるのを確認し、それに<非意図性>と<瞬間性>の意味素性が関与していることを確認した。

・複文では、「ふと」の場合は、本稿で主張した「(a)事態の成立に明確な要因が存在せず、その事態が瞬間的、偶発的に発生する」場合と「(b)ある刺激を受けて瞬間的、反射的に事態が成立する」場合とがあることを確認した。(a)の場合は「と」の条件節と「とき」の節に現れ「発見的事態を導く」という役割をし、(b)の場合は、事態を引き起こす根拠が明確な場合や因果関係を表す「て」と「に」の複文に現われる場合、「思わず」に置き換えられると主張した。一方、「思わず」の場合は、事態の成立に明確な要因が常に存在するため、因果関係を表す「ので」「て」「に」文の主節に頻繁に現れることを確認し、基本的な「ので」文とは違って、意志性が関与しないことが分かった。

(2) 3.2 動作主の意志性の有無による現象

「思わず」の場合は、動作主が有情物(人間)のみであることを述べた。「ふと」の場合は、動作主が有情物である場合と非情物である場合とがあって、「ふと」が限定する動作主が非情物の場合は、発見の意味を表す構造に縛られ、文の主語にくる主体が「ふと」の限定する事態の認識主体として作用することが分かった。

(3) 3.3 動詞との相関性及び意味的現象

「ふと」と「思わず」は<非意図性>がその語彙の意味に内在しているにも関わらず、意志動詞とも無意志動詞とも共起するという特徴が見られ、両者共に意志動詞と共起する場合、その動詞の持つ意志性にも関わらず、副詞の語彙的な意味に左右されて無意志化されていることが分かった。

また、動詞分類別では、「ふと」の場合は、認識活動を示す動詞類が約6割を占め、発見的事態を導くのが「ふと」のもっとも本質であることを確認した。それに対して「思わず」の場合は、事態をもたらす要因が常に存在するため、意志動詞が約6割を占め、言語活動動詞や動作性動詞に多く、感情の高まりや感動あるいは生理的興奮、恐怖感などが引き起こされるときに用いられることが確認できた。

【参考文献】

- 浅野百合子(1982)「ウツカリ、ツイ、オモワズ」国広哲弥編『ことばの意味3』平凡社 p 195-202
- 庵功雄 他(2002)『日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 奥田靖雄(1983)「を格の名詞と動詞のくみあわせ」言語学研究会編『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房 p 21-149
- (1984)「語彙的な意味のあり方」『ことばの研究・序説』むぎ書房 p 3-20
- 川井章弘(1996a)「無意識を表すとされる「ふと」の談話機能について」『林巨樹古希記念論文集』武蔵野書院 p 155-168
- (1996b)「無意識類副詞-「つい・うっかり・おもわず」についての語用論的考察-」『緑岡詞林』第二十号 p 36-51
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト-現代日本語の時間表現』ひつじ書房
- 小矢野哲夫(1982)「副詞の意味記述について-方法と実際-」『日本語・日本文化』第11号 p 39-63
- 酒井悠美(1998)「無自覚の行為であることをあらわす副詞」『国文学解釈と鑑賞』第63-1号、至文堂 p 94-103
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 田中聡子(1997)「「てみる」の意味記述の試み」『言語と文化』第1号、p 93-110
- 寺村秀夫(1983)「時間的限定の意味と文法的機能」『副用語の研究』明治書院 p 233-266
- 豊田豊子(1978)「接続助詞「と」の用法と機能(1)」『日本語学校論集』5号 p 28-46
- 中右 実(1980)「文副詞の比較」『日英語比較講座2 文法』大修館書店 p 157-219
- 仁田義雄(1983)「動詞に関わる副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』2巻10号 p 18-29
- (2003)『副詞的表現の諸相』くろしお出版 p 131-143
- 日本語記述文法研究会(2003)『現代日本語文法4』くろしお出版
- (2009)『現代日本語文法2』くろしお出版
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- (2002)『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
- 宮島達夫(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 森田良行(1989)『基礎日本語1-意味と使い方』角川書店
- 森本順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
- 金承偶(2007)「[わざわざ][わざと]に関する一考察」『日語日文学研究』63-1韓国日語日文学会
- 李澤熊(2000)「思わず、つい、ふと(ふっと)、何気なく」の意味分析『韓日語文論集』第4輯 p 217-233
- 日本大事典刊行会(1972)『日本国語大辞典』 第二版 編集委員会 小学館

【用例出典】

- 赤川次郎(2006)『マリオネットの罟』文芸春
五木寛之(1968)『男だけの世界』中央公論社
奥田英朗(2004)『東京物語』集英社
———(2005)『マドンナ』講談社
北川悦吏子(1997)『最後の恋』角川文庫
———(1995)『愛していると言ってくれ』角川文庫
———(1996)『恋人たちの誤算』新潮社
———(1996)『ロングバケーション』角川文庫
———(2003)『LOVE STORY』角川文庫
小松江里子(2004)『元カレ』講談社文庫
さくらももこ(2001)『もものかんづめ』集英社
篠田節子(2000)『女たちのジハード』集英社文庫
東堂志津子(1996)『やさしい関係』角川文庫
夏目漱石(1952)『こころ』新潮文庫
森瑤子(2000)『あなたに電話』角川文庫
山田邦子(1997)『同窓会』幻冬舎文庫
唯川恵(1995)『さよならをするために』集英社
———(2004)『肩ごしの恋人』集英社
———(2005)『燃えつきるまで』幻冬舎文庫
———(2006)『今夜誰のとなりで眠る』集英社

要 旨

本稿は、「主体の意図に関わる副詞」として位置づけられている「ふと」と「思わず」を対象とし、意味・統語的観点から分析を試みたものである。従来の研究では、両者を類義語として扱いながら、意味面における共通側面については主張されていなかった。また、いずれの研究も意味の側面に重点が置かれていて、構文環境や用法の制約などが明確に把握されていなかった。

そこで、本稿では、この2語の統語的現象を明らかにするために、単文と複文にわけて現象の分析を試みた。基本的に両者は単文では同列レベルの副詞であるため、〈非意図性〉と〈瞬間性〉の意味素性が共通に関与していた。しかし、複文では、本稿で主張した「ふと」の2つの側面のうち、(a)の偶発的なものは「ふと」のみの側面として「と」の条件節と「とき」の節に現れ「発見的事態を導く」という役割をし、それが「ふと」の本質的な用法であることが確認できた。また、(b)の条件・反射的なものは「ふと」と「思わず」の共通側面として、事態を引き起こす根拠が明確に明示される場合や因果関係を表す「て」と「に」の複文に現われる場合は、「ふと」と「思わず」が置き換えられると主張した。

次に、動作主の意志性の有無による現象を検討した。その結果、「思わず」の場合は、動作主が有情物(人間)のみであるが、「ふと」の場合は、「有情物」「非情物」の両者が動作主として用いられ、「ふと」が限定する動作主が非情物の場合、発見の構造に縛られ、文の主語にくる主体が「ふと」の限定する事態の認識主体として作用することが分かった。

最後に、動詞との相関関係について検討した。その結果、「ふと」と「思わず」は〈非意図性〉がその語彙的意味に内在しているにも関わらず、意志動詞とも無意志動詞とも共起するという特徴が見られ、両者共に意志動詞と共起する場合、その動詞の持つ意志性にも関わらず、副詞の語彙的な意味に左右されて無意志化されていることが明らかになった。

キーワード：副詞、ふと、思わず、非意図性、瞬間性、偶発的、条件・反射的

투 고 : 2009. 11. 30

1차 심사 : 2009. 12. 12

2차 심사 : 2010. 01. 09